

写された大正時代

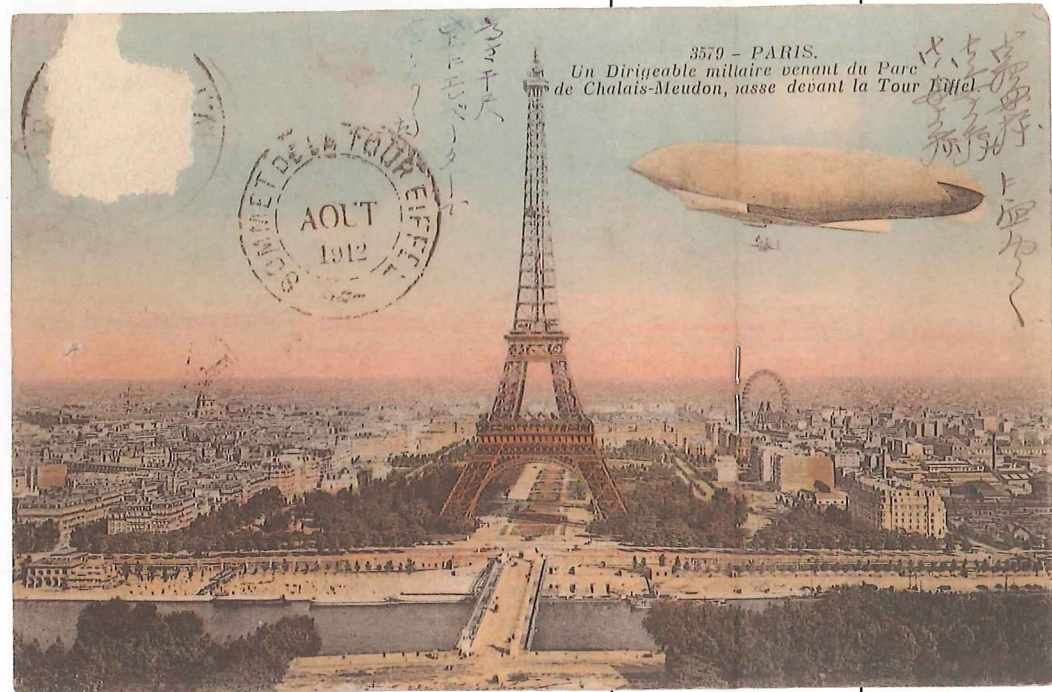
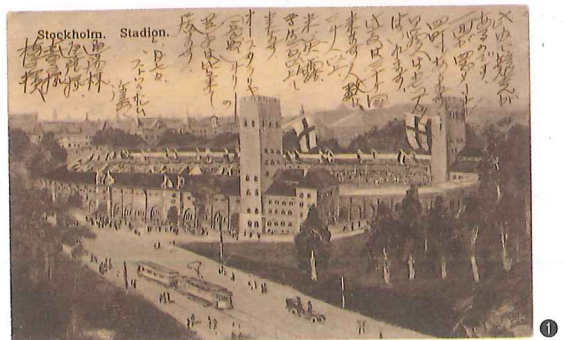
三島弥彦とストックホルムオリンピック

明治45年(1912)のストックホルムオリンピックは、日本が初参加した大会でした。この記念すべきオリンピックに参加した選手が三島弥彦と金栗四三です。三島は100メートル走・200メートル走・400メートル走、金栗はマラソンにそれぞれ出場しました。2人とも残念ながら成績は振るいませんでしたが、日本のオリンピック史にその名前は刻まれています。

弥彦は学習院の出身で、東京帝国大学在学中に代表選手に選ばれました。大会の時の様子は、弥彦が現地から書き送った絵葉書で知ることができます。ストックホルムでは競技場の絵葉書を買って「此内で競走があるので。一回が四百メートル、四町もあります。見物人は五、六万人はいれます。此度は三十ヶ国来ます。人数は二千人以上…」と大会前の興奮を家族に宛てて綴りました。その後、競技に敗退した弥彦はデンマークを経てドイツ、フランス、イギリスを歴訪して帰国します。ドイツのハンブルクからは、「競走はとうとう敗けてしまいました」と報告する絵葉書を甥の通陽に出しています。

通陽は、日本におけるボーイスカウト運動を推進した人物として知られていますが、学習院在学中から絵葉書の魅力に取りつかれ、「ポスト・キング」というあだ名で呼ばれるほどの絵葉書収集家でもありました。それを知る弥彦は、各地で美しい絵葉書を買って、現地での所感や絵葉書についての説明などを様々に記して通陽に送りました。ヨーロッパの絵葉書は、印刷技術が高く美しいものが多いので、通陽にとって叔父である弥彦からの絵葉書は何よりの楽しみであったことと想像されます。

ヨーロッパから送られたこれらの絵葉書は、日本人初のオリンピック選手である弥彦の息遣いを今に伝



えると共に、当時、絵葉書が主要な情報伝達手段として機能していたことをあらためて思い出させます。

第一次世界大戦と日本

大正3年(1914)、ヨーロッパで第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に基づいて連合国側に立って参戦します。しかし、日本は西欧へ出兵したわけではなく、実際の戦闘は主に中国・青島のドイツ要塞が舞台となりました。人的・物質的損害をほとんど受けることのない日本は、戦争で生産力が低下した西欧に代わって輸出製品のシェアを拡大させ、国内は好景気に沸きます。

戦争の推移は、新聞や『欧州戦争実記』といった雑誌などによって国内にもたらされました。西欧から届いた写真や絵などもこれらの出版物に転載されました。

絵葉書には、この戦争で新たに登場した戦車や潜水艦なども描かれていましたが、圧倒的に多いのは戦勝記念・講和記念、あるいは戦勝祝賀パレードなどの絵葉書でした。戦闘や軍事ではなく、戦勝国としての日本=国際社会の一員になった日本、というイメージが絵葉書においては表現されています。これは、西欧で発行された絵葉書が戦争協力を国民に呼び掛ける「プロパガンダ」的要素を持っていたのとは大きく異なっています。日本における絵葉書の題材の偏りは、この戦争が大きな意義を持つものであるとは必ずしも主張できない性格のものであった事実を、示しているといえるでしょう。絵葉書に何が描かれているのかを見ることで、その当時の日本社会でその出来事がどのように捉えられていたのかを知ることができます。



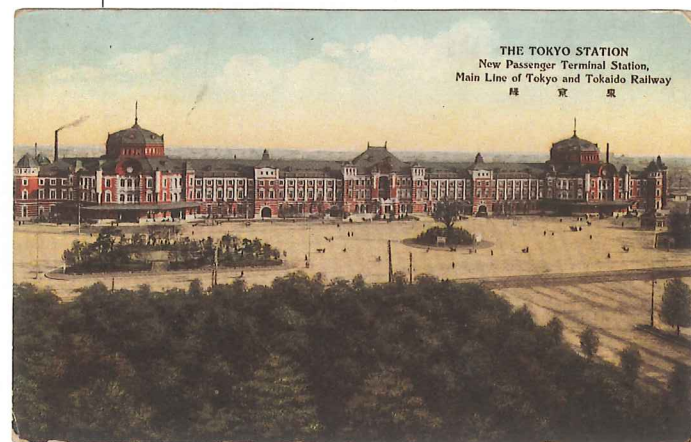
大正時代の東京

大正期の東京は、^{りょうらんかく}浅草十二階やお茶の水のニコライ堂といった明治以来のランドマークがそびえ立ち、銀座や日本橋には洋風建築が肩を並べて建つ、有数の近代都市でした。さらに、この時期には新たな建築が東京に姿を現しています。その代表が東京駅です。大正3年(1914)に開業した東京駅は2つのドームを戴く煉瓦造りで、「帝都」の表玄関に相応しい威容を誇っていました。フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテル、ビジネスと商業の複合した近代ビルの先駆けである丸ビルなどもこの時期の建築です。

しかし、これらの街並みは、大正12年(1923)の関東大震災で大打撃を受け、変容を余儀なくされます。浅草やニコライ堂は、まるで明治という時代が遠く過ぎ去ったことを象徴するように姿を消しました。当時の絵葉書には、明治末~震災前の、今は失われた東京の景観が写し取られています。こうした点で絵葉書は、失われた都市の記憶を伝える役割を担う重要なメディアであるといえます。

祝祭の帝都 ~花電車~

花電車—今はもうほとんど失われた文化でしょう。明治末に実用化がはじまった東京の市電は、普段は市民の足として活躍し都市の交通をますます便利にしました。いつもの市電は、祝祭の折には様々に飾り立てられ花電車となりました。その名のごとく花で埋め尽くされたものばかりでなく、台車の上に大砲の模型や人形を配置した特殊なタイプも作られました。夜にはイルミネーションで光り輝き、幻想的な雰囲気を現



出させました。街頭には花電車の姿を一目見ようと多くの人々が繰り出しました。

大正時代には帝都・東京において、^{てんちようせつ}天長節(天皇誕生日)、青島占領(世界大戦における勝利)、大正天皇即位大礼、世界大戦休戦条約成立祝賀会、明治神宮鎮座祭など数々の祝祭があり、花電車が運行されました。祝祭の終了と同時に花電車は姿を消し、東京は日常に戻りました。

花電車はエフェメラル(消え去ってしまう)な存在だったため、その姿を写した絵葉書の人気は高く、数多く印刷されました。



- ① 明治45年 三島弥彦より三島通陽宛 ストックホルムスタジアム (三島家蔵 尚友倶楽部保管)
- ② 大正元年 三島弥彦より三島通陽宛 エッフェル塔の前を通過する軍用飛行船(同上)
- ③ 1916年 [イギリスの戦意高揚]準備はいいか、カイザー(個人蔵)
- ④ 大正期 東京駅
- ⑤ 大正8年 皇太子殿下御成年式奉祝花電車
- ⑥ 大正7年 鍋木清方「平和記念」(個人蔵)